

# 教育を問い続けて

暉峻淑子

teruoka issuko

大人の私たちは、何によって将来への希望を感じているのでしょうか。

それは子どもたちの姿をとおしてだと思いません。悲しさや辛い経験もふくめて、子どもたちが生き生きと、希望を失わずにそれぞれの人生を切り拓いているとき、大人の私たちも、明るい未来を具体的に実感できるのではないのでしょうか。逆に、子どもたちが勉強する意味もわからないのに、偏差値に追いつてられ、友情を育むこともなく、自分が本当は何をしたのかもわからず、社会に出ても職がない。憂うつそうな、荒れた空気のなかにいる子どもの姿から、大人は明るい未来の社会を実感することはできません。

他方、子どもたちから見れば、大人がどんな人生を生きているのか、日々その姿を見ることによって、将来の自分の人生を思い描いているでしょう。戦争中、男の子はひそかに言ったものです。「大人になんかなりたくないよ。だつて兵隊にならなくちゃいけないもの……」



photography Asami Kawada

いよ。だつて兵隊にならなくちゃいけないもの……」

そのとおりです。自分の意志によらずに生まれてきた子どもたちは、たまたま大人の私たちがつくりあげた戦争国家や、経済価値優先の過度な競争社会で、思わぬ人生を送ることになるかもしれません。人を殺したくなくても殺したり、会社のために虚偽の報告を書いたり……。子ども的人生に対して私たちが大きな「社会的」責任を負っているのです。

それだけでなく大人の私たちも、子どもたちがこれからつくりあげていく社会如何によって、その晩年を決定される運命にあります。最近、若い政治家たちが、好戦的で、あれほどの犠牲を払った戦争教訓を忘れ、武力による解決を当然とする憲法改定を叫んでいるのを見ると、彼らが真剣に子どもたちの将来に対する責任を考えてのことなのかと心配です。人を殺したくない、殺されたくないという最

小限の普通の価値観さえ、やすやすと捨て去られようとしていくのですから。端的に言えば、軍事社会と福祉社会は相容れない社会なのです。

歴史とは、お互いの世代が影響を与え合うことによって、運命を分かち合う歩みかもしれません。だからこそ、国家は教育を国家権力の支配下に置こうとしてきました。「国を支配するためには学校を支配せよ」と言ったのは、プロイセンのフリードリヒ大王でした。学校教育によって子どもたちを支配者の思う方向に育てていけば、国の未来も、その親や社会をも統制することができます。まだ自我の確立しない子どもは、上からの感化を受けやすいので、独裁的な国家ほど学校教育を支配したがりました。ナチスによる教育支配も日本の戦時教育も、子どもを権力をもつ野心の道具にした点では同じでした。ドイツでは、その過ちを繰り返し返さないために、国家の文部省を廃止して、親と子どもと教師の足もとに教育を返しました。国家権力は、どうしても教育を野心の道具にしたがるからです。各州に文部省はありませんが、教育行政はその地域の市民と親と子と教師が、子どもたちをどのように育て教育すべきか、膝を交えて、自分たちの責任で討議し、決める制度になっています。中学からは、職員会議に子どもの代表

と親の代表が参加します。

私は、海外の学校で出会った、いわゆる異文化の教師たちに、しばしば次のことを聞いてみました。「あなたの教育の目標・理想は何でしょうか」。それぞれの教師は控えめながら、むしろ嬉しそうに語ってくれました。「教育の究極の目的は、子どもたちがそれぞれの、自分の価値に目覚めることです」

また、ある教師は言いました。

「学力とは、読み書きができるということだけではなく、他人の言葉に真剣に耳を傾け、理解し、共感する能力をもつことです」

ある校長は、日本の教育を視察した印象を次のように話してくれました。

「日本では、子どもを順番づけにし、競争させることによって勉強をさせようとしているように見えました。子どもはへなせそのことを学ぶのか」という意味がすっかりわかっていけば、競争させなくても勉強します。子どもとは、もともと好奇心の塊だからです。疑問を解明していく楽しさや創り出す喜びを身につけた子は、学校を卒業しても、一生、勉強を続けていくでしょう。日本のように、子どもときから他人と比較して、優劣の順番づけをすると、子どもは攻撃的になり、嫉妬心もち、自信を失い、協力する人間関係の楽しさがわからなくなるのではないのでしょうか。子どもたちが成人したとき、地球はも

つとひとつになり、貧富の差や宗教の違いや生活習慣の違いをもつ人たちといっしょに、地球環境や平和や福祉について、協力していくようになるでしょう。お互いに考えが違っても、理解し合い尊敬し合って、いっしょによりよい世界をつくっていく。そんな子どもたちの姿を夢見て、私たちはそのためにどんな教育が必要かを考えています」

また、ある若者は次のように言いました。

「日本の留学生を見ると、彼らもその親も、社会のなかで有利な地位につき、一生、有利な生活を過ごすための手段として教育を考えているように見えます。でも、そういう人ばかりだったら、誰が社会を改革するのでしょうか。この社会には、まだまだ改善しなければならぬことがたくさんあります。私たちはそのために教育を受け、世界にもっと大きな自由をもたらす人間になるべきなのではないでしょうか」

日本の、現在の学校教育はどうでしょうか。日本人は江戸時代から、すでに一般の農民の三割が識字教育を受け、寺子屋も普及していたため、OECD（経済協力開発機構）調査団のドナルド・ドーア氏は、それが明治以降の日本の経済発展の原動力になった、と分析しているほどです。つまり、教育は、個人の人間としての必要から生まれたもので、学のある人は、人格の完成度やすぐれた判断力

によつて尊敬されたのです。

日本の教育が国家の道具としての役割を担うようになったのは、軍人勅諭をつくつた山県有朋によつて、教育勅語がつくられてからです。世界の近代国家に百年も遅れて近代国家となつた日本は、強国に追いつき追い越すために、極端な富国強兵政策をとりました。そのために、教育を、国家の目的のための手段とすることを当然と考えました。教育勅語は、現在でも保守的な政治家たちから賞賛され、その道徳性を今日の教育に復活させるべきだと言われます。

しかし、その道徳とは、人間としてもつき普遍的な道徳ではなく、国家のため、国体の護持のために、犠牲をいとわない道徳でした。他者を侵し殺してもいい道徳でした。「夫婦合いやし」などといっても、その夫婦のありかたは、天皇を頂点とする家制度の維持のため、絶対的な権威をもつ家父長のもつて、妻は長男よりも下位に置かれ、自分の財産の処分権もなく、契約の当事者にもなれず、選挙権もなかつた妻の、無条件な服従によつて実現されたものでした。現在のように、両性の個人の尊厳が認められたうえで、協力し、愛し合う夫婦ではなかつたのです。道徳といっても、生まれながらの、身分の差別、貧富の差別が当然視され、戦争による侵略や虐殺・略奪などが善いこととされる、そんな道徳で

した。

戦前と戦後は、どこが根本的に変わったのか、と聞かれれば、戦中派の私は次のように言うでしょう。

戦前は個人も教育も、国の手段とされていましたが、戦後は逆に、個人の人権（環境も含めて）のために国があり、子ども自身のために教育があるのだと。子どもは誰のためでもなく、何かの手段とされるのではなく、それぞれの子どもの豊かな人格の完成のために、学んでいるのだと。また、与えられた資質を開花させる生きがいと喜びが、結果的には社会への貢献となるような、そんな学びであれば、本人にとつても社会にとつても、教育は本当の意味で人権と重なるのではないでしょう。

ヨーロッパでは、国の財政が教育に支出されることほど、国民に喜ばれる税金の使い方はない、という理由で、ほとんどの国が、小学校から大学院までの授業料を無料化、または低額化しています。教育は未来の社会をつくる人間への最優先の投資なのです。経済に投資して、強い経済力をもつたとしても、その経済力を何に、どのように使うかを判断するのは人間です。判断をまちがえれば経済力は凶器にさえなりかねません。

国連の子どもの権利委員会は繰り返し、日本の子どもたちが恵まれた経済環境にありな

がら、過度な競争のなかで、疲れ、ゆとりをなくし、自主的に物事を判断し、行動する自由を失っているだけでなく、子どもたちが自分らしい希望をもつことさえ許されなくなっている、と警告しています。

また、それと同時に教育への国家の介入が、教師の自主性と生き生きとした教育環境を奪っている、と憂慮しています（東京都が行っている、日の丸・君が代の強制や、卒業式・入学式のやりかたへの画一的な統制命令など。従来、子どもたちが教師と相談しながら、自主的につくつていった喜びあふれる卒業式・入学式を「厳粛」という名のもとに教育委員会作成の式に変えてしまいました。子どもこそ学校の主人公なのに）。それらの重圧に耐えかねた不登校の子どもたちが、自分たちの居場所としてフリースクールを選び、そこで発見するのは、いつも他人と比べられ、管理され、順番づけされ、競争のなかにいる自分ではなく、ゆつくりと自分に向き合い、失敗することも人生の経験として許され、自分らしい人生をつくつていく手ごたえと安心感であると云います。

「自由競争」という言葉によつて、人々は競争が自由であると誤解しているようです。しかし、競争は不自由なのです。封建時代の国王、貴族、教会などがもっていた特権は、特権によつて経済の発展や人間の能力の公正

な發揮を妨げました。国王や貴族から特許を受けた商人だけが利益の一部を権力者に上納することを条件に、経済の独占権をもちました。身分による制限が人々の向上心を奪いました。それに対してアダム・スミスは、経済の發展にとつては、市場の自由競争こそが神の手に代わる最善の方法だ、と言いましたが、それは当時、理由のある主張でした。

しかし、資本家と労働者は、初めから平等ではなく、身体の強健な人と病弱な人も、平等ではありません。不平等な人々に競争を強いることは、弱肉強食の社会をつくることにはなりません。つまり、自由主義経済の自由とは、契約の自由、営利の自由、強者の自由であるに過ぎず、現在の憲法が保障している、飢え死にしない自由、病気になるれば、誰もが医療を受けることができる自由、ひとしく教育を受け、学ぶことができる自由、誰もが社会から排除されずに社会参加できる自由ではありませんでした。それらの自由は、先人が嘗々と努力してつくりあげてきた社会制度なのです。市場の自由は、そのまま人間の自由ではなかったからです。現在の新自由主義経済も、効率的に富を貯めるには最適な方法でしょうが、人間らしい互助、協力、公正な社会をつくるには、必ずしも適していません。

スポーツを見ればわかるように、競争には

目的と強い管理がつきものです。企業の目的は利潤をあげることですから、働く人々は利潤を生産する人間として管理され、競争させられます。企業間競争や学校間競争は、その内部の人間や、子どもたちの自由を奪います。それは精神の自由をも束縛します。現在、学校を卒業する人たちの八割までもがサラリーマンとなる社会では、そのような競争原理が社会全体を支配する原理にさえなるのです。教育を支配する原理にさえなるのです。一九六〇年代までは、サラリーマンとして就職するのは卒業生の四割ほどで、農業や自営業や誇り高い職人が社会を支えていました。そこでは人間に対する信用や自然への愛が、価格競争や大量生産とは異なる原理の体系を形づくっていました。

人間を育てる学校教育のなかに非人間的な市場の競争原理がもち込まれれば、子どもは歪みます。現在の競争教育は、産業利潤を生み出しそうなエリートだけが国家の財政補助を受け、優遇されています。ハイパーサイエンス高校や、有名大学に入学する生徒の多い高校には、特別の補助金が配分されています。習熟度別学級を採用する学校には、教師の加配があります（エリートが必ずしも人間的に優れた人でないことは、例えば、三菱自動車のリコール隠しや贈賄事件が示しています）。残りの人たちは差別され、早くから優劣の思

想を植えつけられ、あきらめと挫折感を植えつけられています。習熟度別の教育が学力をあげるものではないことは、国際的にすでに実験済みであるにもかかわらず。

その子どもたちに愛国心や日の丸・君が代が強制され、批判する能力が押さえ込まれています。負け組の若者は、卒業してもフリーターにしかならず、結婚して子どもも育てられない低賃金と不安定労働を甘受しなければなりません。それらのすべては本人の自己責任にされてしまい、大きな社会格差を広げていく差別社会は、究極的には戦争を招いていると思います。なぜなら、「ならずもの国家」呼ばわりするように、戦争は相手を差別し、自国の軍隊の若者を死んでもいい人間として差別するものだからです。助け合う友情や、一体感を感じる人間の喜びを子どもたちから奪ってしまった私たち大人は、その責任をどんなに反省してもしすぎることはないでしょう。私はある大学の学生のレポートで「私は助け合うという日本語があることは知っていたが、その言葉を今まで一度も頭に思い浮かべたことがない」という文を読みました。彼らの息苦しさ、人間性から離れた日々をあらためて思い知らされたのでした。

（このほか、いつこ・埼玉大学名誉教授

著書に「豊かさの条件」岩波新書